

新刊 Book Reviews

□松谷 茂：打って出る 京都府立植物園 A5. 159 pp. 2011. 淡交社. ¥1,600 + 税. ISBN 978-4-473-03758-9.

1923年に開園した京都府立植物園は、大東亜戦争敗戦の結果、米軍家族住宅として接收され、1959年に返還されたときにはすっかり荒廃していた。整備の結果、再発足したのは1961年である。著者が京都府林務課から同園に赴任したのは1995年。以後2010年に園長として定年を迎えるまで、育成、展示、行事などの活性化について、現場職員と積極的に交流して工夫し、入場者数の大幅な増加を達成した。そして、その栽培・管理技術は国際的に評価され、草花の新品種の展示場として認定されるまでになった。本書はそういう体験を率直に、かつ楽しそうに語っている。私にはできそうもないことだが、なにやら「俺もやればできる」と思わせる文章で、元気づけられる。

(金井弘夫 H. KANAI)

□塚原東吾(編)：科学機器の歴史・望遠鏡と顕微鏡。イタリア・オランダ・フランスとアカデミー B6. 194 pp. 2015. 日本評論社. ¥2,600 + 税. ISBN 978-4-535-78792-6.

神戸大学の科学史教室で続けられてきた研究会の中間まとめ。塚原東吾(科学機器の歴史)、三浦伸夫(数学器具としての比例尺の成立と伝搬)、中島秀人(フックの科学的業績と実験機器の技術的起源)、塚原東吾(17～18世紀オランダ科学における望遠鏡・顕微鏡・科学機器。エージェントとしてのオランダ科学)、隠岐さや香(望遠鏡つき四分儀と子午線測量の歴史。地図作成からメートル法まで)、平岡隆二(望遠鏡伝来と長崎)の諸氏の研究・考察が披露されている。

読んでいるうちに、旧制中学の時代に「幾何」という授業があったことを思い出した。計算をせずに、定規やコンパスだけで線分や角を分割できるので、数字嫌いの私には楽しかった。「幾何」は昔は「用器画」と呼ばれ、イチョウの精子発見の平瀬作五郎氏は、その教科書を著している。戦後の新学制時代には「図形」という科目が残っていたが、いつの間にか「算数」の中に取り込まれてしまった。

築城技術から受け継がれた様々な製図器具が用

途別に分化し、次第に精密化して行く過程で、長距離測量に必要な望遠鏡用レンズが求められ、レンズ研磨用の定規まで用意されている。これによって地球の大きさが測量され、メートル法の根拠が与えられた。一方、これらの技術の維持・伝承には、それぞれの職業のギルドが重要な役割を演じ、各国のアカデミーの活動が、国際的な知識の交流・普及に貢献しているとのこと。とくにレンズ制作技術の発達で、天文学の発展をうながし、ルネッサンスを演出した「科学」の武器となったという。

クロノメータと顕微鏡については、本書では触れられていない。正確なクロノメータの開発は、地球規模から宇宙規模の現象認識に不可欠なものだが、これを論ずるには、別な一冊が必要だろう。また、望遠鏡用の大口径・長焦点レンズと顕微鏡用の小型・短焦点レンズでは、技術的な問題を一緒に扱うのは難しいのかも知れない。日本の鎖国期にもたらされた望遠鏡が、レンズの制作技術を日本にも定着させ、御用眼鏡師という職業を長崎で産み、輸出までされたことを跡づけている。

知らないことばかりの話なので、読むとなにか得をしたような気分になる。

(金井弘夫 H. KANAI)

□Peter Crane(著)：矢野真千子(訳)、長田敏行(監)：イチョウ 奇跡の2億年史 生き残った最古の樹木の物語 B5. 439 pp. 2014. 河出書房新社. ¥3,500 + 税. ISBN 978-4-309-25302-2.

原本はP. Crane: Ginkgo. Yale University Press (2013) ISBN 978-0-300-21382-9.

イチョウは日本のどこにでも見られるごく普通の樹木だから、目に入っても特別なものとは思わない。しかしイチョウは日本に古来自生していたものではなく、中国が原産と言われている。その祖先と思われる化石は、ジュラ紀(約2億年前)にはじまり、地質時代を通じて地球上のあちこちで大繁殖したあぐく、世界のどこからも姿を消したが、中国奥地(どこかは不明)で辛うじて生き残り、その後各地で植栽されたと見られる。日本では中国からタネが持ち込まれ、風土に合ったために全国的に広がったとされる。ヨーロッパへはケンペルによって紹介され、やがて栽培も行われるようになり、ここでも育て易さの故に、そして変わった葉形と樹形の美しさの故に各国、そ